

木村定三コレクション M318 単龍環頭大刀の検討

京都大学白眉センター 金 宇大

はじめに

愛知県美術館・木村定三コレクション所収の古墳時代環頭大刀のうち、とりわけ注目すべき資料がM318の単龍環頭大刀（以下、M318刀）である。出土地こそ不明であるが、中心飾の龍像は、国内では類をみないほど文様要素に崩れがない。日本列島で出土する単龍・単鳳環頭大刀は、その文様が次第に形骸化していくことが知られており、新納泉は中心飾と外環文様の崩壊プロセスを区分し、6段階の相對編年（図2）を設定した（新納1982）。この基準に照らすと、M318単龍環頭大刀は、外環文様が判然としないため確定的ではないものの、少なくとも新納Ⅲ期以前に位置付け得る、非常に古い段階の資料と考えてよい。このような古段階の資料については、その製作地をめぐって議論が交わされてきた。すなわち、日本列島出土単龍・単鳳環頭大刀は、どこまでが舶載品でどこからが列島製品なのか、という問題である。筆者も、鑄造方法に着目して、日本列島で出土する資料のほとんどが列島内での製作品である可能性を論じたことがある（金宇大2017）。しかし、後述するが朝鮮半島での出土資料は極めて限られており、朝鮮半島での製品の実態が依然不明瞭なままである点が、舶載品と列島製品との峻別を困難にしている。

本稿では、M318刀の細部の特徴を類例資料と比較し、その資料的意義を詳細に検討する。その上で、上述した製作地の問題について若干の考察を試みたい。

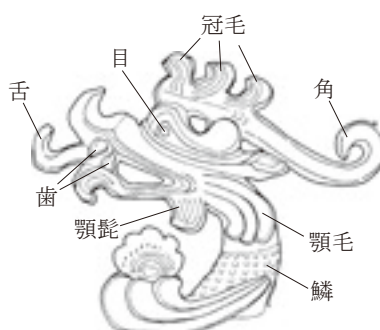


図1 龍首の各部名称

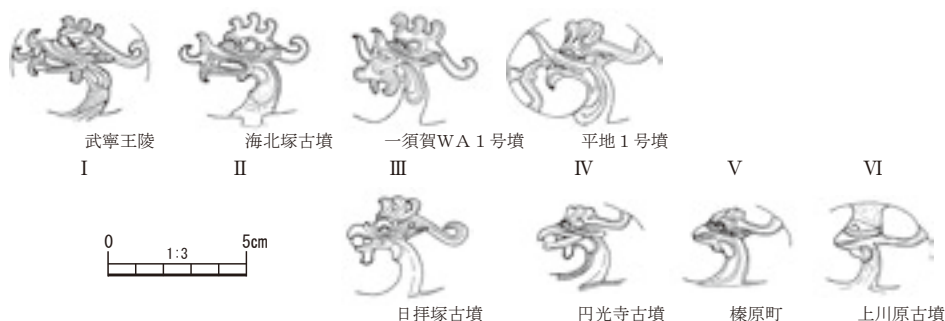


図2 単龍・単鳳環頭大刀の型式学的変遷

(1) 細部の特徴と類例との比較

M318刀の形態的特徴の概要については、本書収録のコレクション目録に譲ることとし、ここでは、細部の諸特徴を国内外で出土した古相の単龍・単鳳環頭大刀に照らしつつ、より踏み込んだ評価をおこなう。

中心飾の図像 M318刀は、「口を上下に開いて舌（もしくは短い雲気）を吐く単龍環頭大刀の系列群」（穴沢・馬目1986）に属する。これらの系列群の資料はいずれも、個々の冠毛が互いに触れ合わず独立しており、角も外環から離れているなど、龍首の各パーツが明瞭に表現されている。そのため、単龍・単鳳環頭大刀の中でも、最も古い時期に製作された系列群とされる。M318刀は、既存の資料では最古の例とされる公州武寧王陵出土刀（図4-1）を標識とする「武寧王陵系列」に該当する。

文様細部の具体的な特徴を確認していこう。まず、口内に上下の歯が明瞭に表現されている点が注目される。歯の表現は、形骸化が比較的早い文様要素で、新納Ⅲ段階に属する資料でも、表現が曖昧になっていたり、すでに省略されてしまっていたりする⁽¹⁾。次に、顎毛の表現に着目したい。M318刀の顎毛表現は非常に特徴的で、三つの束に分かれて表現されている。三束に分かれた顎毛をもつ図像は国内外でもほぼ類例がなく、唯一、武寧王陵刀にみられる。一方、舌の表現はやや特殊で、大部分の単龍環頭大刀の図像が突き出された舌の先端を上方に巻き上げるのに対し、M318刀は上方に反り上がった舌の先端が若干下方に垂れ下がっている。こうした形状の舌をもつ資料に、滋賀県北牧野2号墳出土刀（図4-2）がある。北牧野2号墳刀は列島出土資料の中では大阪府海北塚古墳出土刀（図4-3）と並んで最古相に目されるが、中心飾を外環と一鑄で作り出し、外環も鍍金で仕上げるもので、いわゆる「一須賀様式」（大谷2006）とは特徴をやや異にする⁽²⁾。

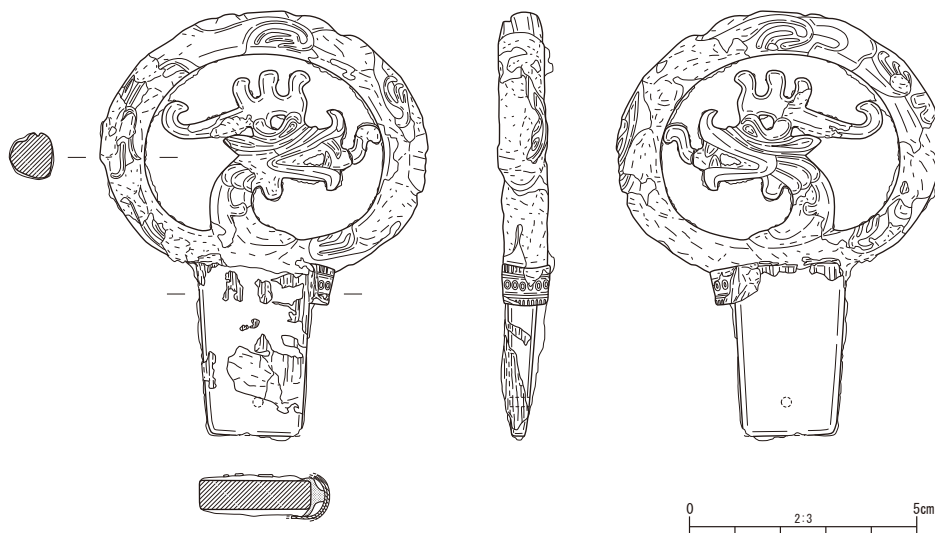


図3 M318 単龍環頭大刀実測図

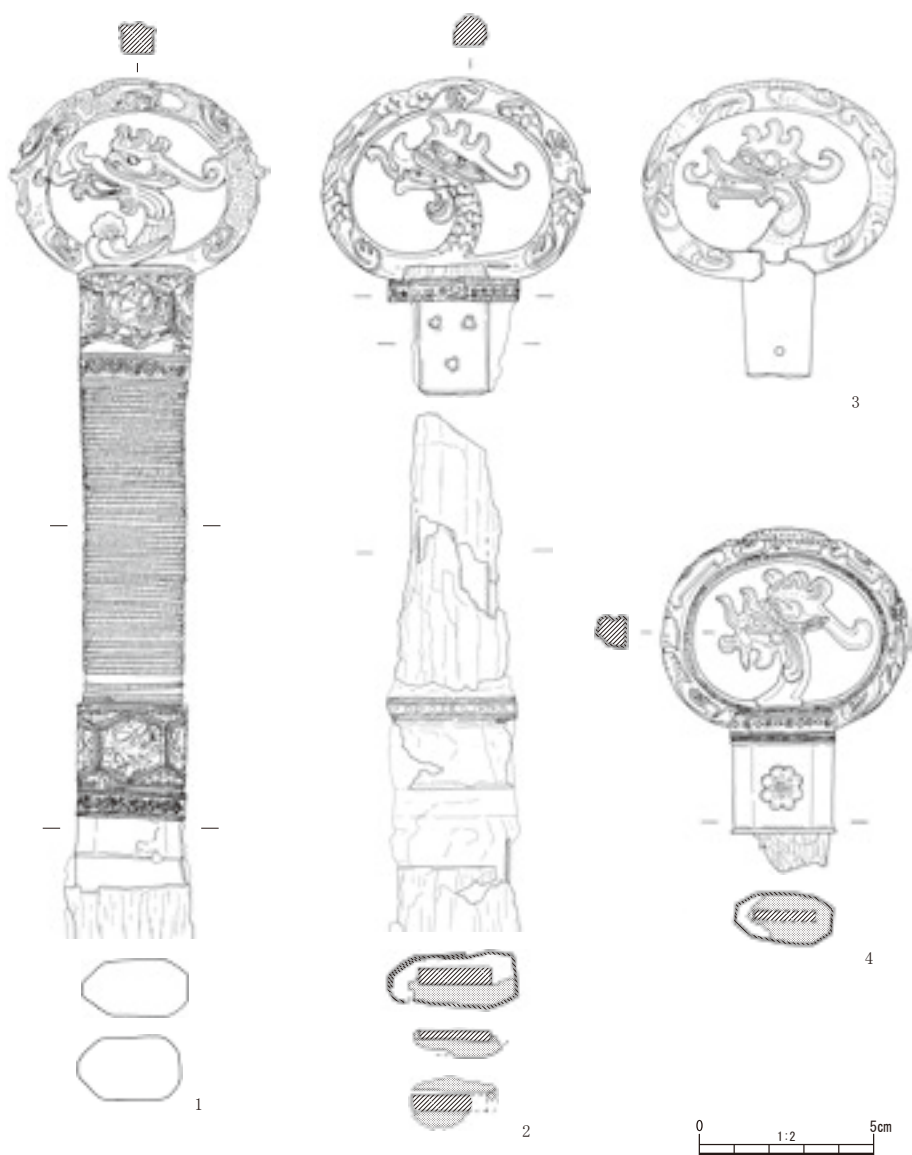


図4 古い段階の単龍環頭大刀（1）

1. 公州・武寧王陵、2. 滋賀・北牧野2号、3. 大阪・海北塚、4. 大阪・一須賀WA1号

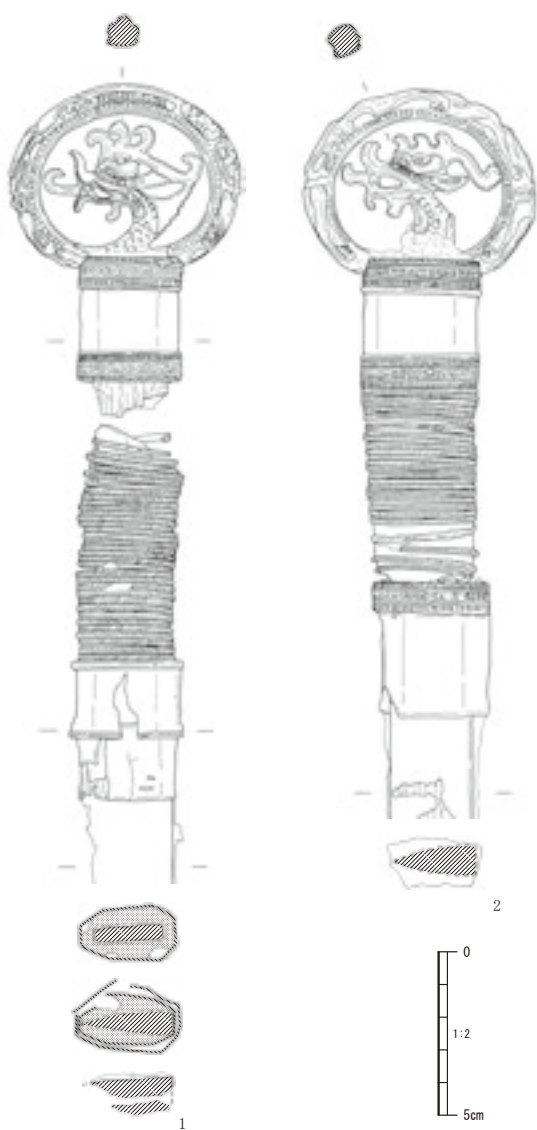


図5 古い段階の単龍環頭大刀（2）

1. 出土地不明、2. 伝 昌寧出土

外環文様 M318刀の外環には、中心飾の龍首とは別の「2頭の龍が相互に相手の尾を喰み向っている」、いわゆる「喰合型」（穴沢・馬目1976）の外環文様が描かれている。喰合型の外環文様については、大谷晃二により「足首の向き」と「足首と角の位置関係」に基づいた分類が示されており（大谷2006）、銹のため文様の詳細が不明であるものの、M318刀は大谷分類の「喰合型ⅠA」に属する。喰合型ⅠAに該当する資料としては武寧王陵刀や旧小倉コレクション313の伝昌寧出土刀（図5-2）が知られているが、確実に日本列島で出土したとされる資料には現在のところ例がない^{（3）}。

なお、M318刀には鱗が表現されていない可能性が高い。銹に覆われて表面が見えない箇所が多いため確実ではないが、現状で観察可能な部位には鱗は確認できなかった。鱗の有無を単純に時期的な要素と捉えるのは難しいが、欠落した文様要素があることには留意しておきたい。

環頭部のつくり M318刀は、中心飾と外環を一体鋳造でつくり出し、全体を鍍金で仕上げている。外環を鍍金で仕上げるため、外環内周に刻みをもたない。耳と顎髭は佩裏・佩表でそれぞれ独立した表現となっており、蠟型を用いた鋳造による製作と推定される。銹のため不確実ではあるが、外環内外の側面に型割り線らしきものは確認されず、蠟素材を直接加工して型本体をつくる直接失蠟法により製作されたものであろう。日本列島で出土する古い段階の資料は、一部を除いていずれも間接失蠟法によりつくられた可能性が高く、製作地推定

の一つの根拠になり得ると考えられる（金跳咏2013、金宇大2017）が、M318刀の製作技法上の特徴はそうした古相の列島製品とは相違している。

魚々子文責金具 単龍・単鳳環頭大刀に付随する双連珠文責金具で、中央の文様帯に魚々子文のみを施す例は珍しく、国立歴史民俗博物館所蔵刀（図5-1）や先述の伝昌寧出土刀にみられる⁽⁴⁾。ただし、M318刀が銀地金張ないし金銅張でつくるのに対し、上の2例は銅地金張とみられる。

以上を総合すると、M318刀は、日本列島製の蓋然性が高いと考えられる（金宇大2017）「一須賀様式」に属する資料群とは相違点が多く、武寧王陵刀や伝昌寧出土刀など半島での製作品ないしその可能性が高い資料と多くの特徴が合致する。したがって、M318刀は半島出土品か、あるいは半島で製作されたのち搬入されたものである可能性が高い⁽⁵⁾。その具体的な故地は、武寧王陵刀との文様細部の共通性から百済が最大の候補となろうが、大加耶系工人の関与の可能性も残る。

（2）武寧王陵出土刀との共通性とその意義

M318刀を考える上で特筆すべき点が、上述した武寧王陵刀との龍像の共通性であろう。国内外の既存の資料と比較しても、M318刀が最も武寧王陵刀と図像的に近似している。

武寧王陵刀の製作地をめぐるのは複数の見解がある。町田章は、武寧王陵が南朝の梁の墓制として知られる塋室墓を採用していること、武寧王が521年に「使持節都督百済諸軍事寧東大將軍百済王」に冊封されたという記事が『三国史記』にみられることから、武寧王陵刀は南朝でつくられ武寧王

に賜与されたものと考えた（町田1976）。その後、武寧王陵刀と比較し得る資料が百済圏域で発見されなかったため、「南朝製作説」は一定の説得力を保っていたが、2000年代に入ると、天安龍院里1号石槨墓の単鳳環頭大刀（図6-3）や公州水村里1号墳の龍文素環頭大刀（図6-1）など、百済圏域での龍鳳文環頭大刀の発見が相次ぎ、韓国の研究者を中心に武寧王陵刀の「百済製作説」

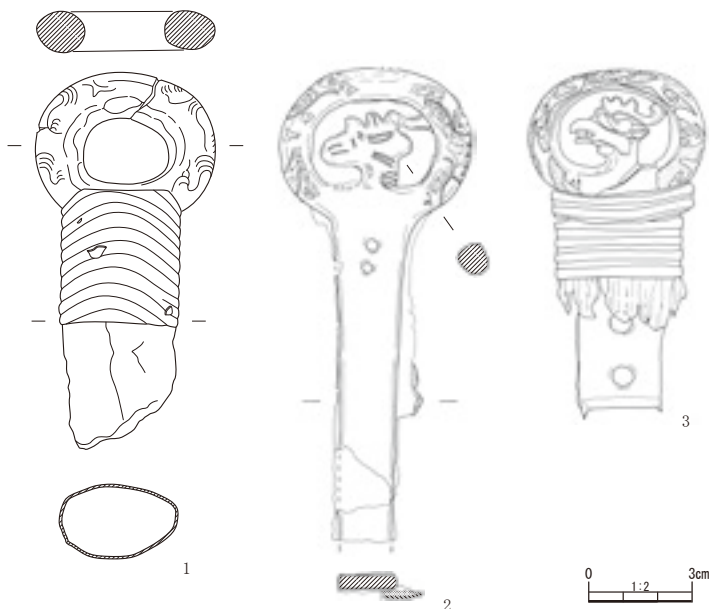


図6 漢城期百済の龍鳳文環頭大刀

1. 公州・水村里1号土壙、2. 天安・龍院里12号石槨、3. 天安・龍院里1号石槨

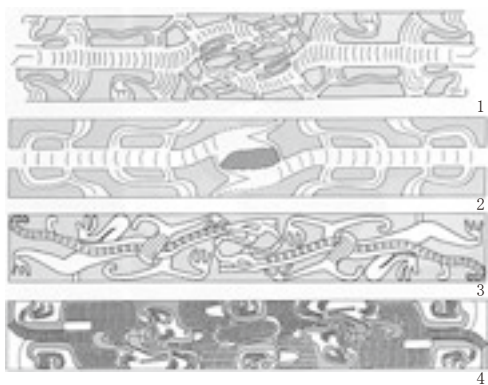


図7 百濟出土の龍鳳文環頭大刀の外環文様

1. 公州・水村里1号土墳、2. 天安・龍院里12号石槨、
3. 天安・龍院里1号石槨、4. 公州・武寧王陵

が積極的に論じられるようになる。漢城期以来の百濟での大刀製作系譜に武寧王陵刀を位置付ける見解（李漢祥2006ほか）のほか、武寧王陵刀と共伴する各種金工品に大刀と同一の製作技術が認められる点から百濟製作説を主張する見解（金吉植2006、崔基殷2014）、文様要素や赤色顔料の使用状況も武寧王陵出土の他の金工品と共通するとする指摘（崔基殷2014）など、様々な側面から百濟の工人集団による製作が論じられている。

このように近年は、専ら百濟での製作を想定する見解が優勢である。しかし、龍院里1号石槨墓刀や水村里1号墳刀は、中心飾や外環文様の特徴（図7）に武寧王陵刀との差が大きく⁽⁶⁾、ただちに同一製作系譜に連なるものと位置付けるのは難しい。また、漢城期百濟の龍鳳文環頭大刀と武寧王陵刀には、製作時期にかなりの年代差があるのも難点の一つである。武寧王陵の共伴金工品の分析により、百濟製作説の蓋然性はかなり高くなったが、直接的な決め手を欠いているというのが現状といえる。

M318刀の存在は、武寧王陵刀と同様の図像的特徴をもつ大刀が複数存在していることを示唆している。武寧王陵刀のような大刀が一定数流通していたということになれば、武寧王陵刀が南朝からの無二の下賜品であった可能性を否定する一材料となる。M318刀は出土地不明であるため、M318刀も中国南朝での製作品である可能性は排除できないが、M318刀と同様の双連珠魚々子文貴金具をもつ伝昌寧出土刀や国立歴史博物館所蔵刀が、大加耶系の鑄造技術である間接失蠟法での製作品とみられる点を勘案すると、武寧王陵刀やM318刀のような単龍環頭大刀が朝鮮半島内である程度流通していた公算は大きい。M318刀は、武寧王陵刀の百濟製作説を補強するとともに、将来的に朝鮮半島で武寧王陵刀と同様の単龍・単鳳環頭大刀が新たに発見される可能性をうかがわせる。

おわりに

以上、M318刀と類例資料との比較検討を通じて、単龍環頭大刀の流通についての若干の考察を試みた。M318刀は、文様の特徴や製作技法が、現状で最古の例とされる武寧王陵刀と共通性が高く、朝鮮半島での製作品である可能性が高い。出土地に関する情報が失われている点が惜しまれるが、依然高い学術的価値を認めることができる。

今回の調査では、銹のため観察が困難な箇所があり、文様の全貌を明らかにすることができなかった。今後、保存処理や科学的分析が進み、より深い検討が可能となることを期待している。

註

- (1) いわゆる「皇子塚系列」(大谷2006)の資料群の中に、歯の表現をもつものが現れるが、これらの図像的特徴における復古的な様相は、半島からの二次的な伝播の結果ではないかと考えている(金宇大2019)。
- (2) 一須賀様式とは、大谷見二が設定した、表現様式に共通性をもつ複数系列にまたがる資料群である。「岩田系列」、「一須賀系列」、「弓矢系列」(穴沢・馬目)など古相の資料群が含まれるが、各系列の古い段階の資料はいずれも外環が銅地金張である点が大きな特徴である。
- (3) 先述した一須賀様式資料群の外環文様は、いずれも「喰合型Ⅲ」である。
- (4) 大阪府塚原P1号墳でも双連珠魚々子文を施した資金具が出土しているが、この資金具は魚々子文が凸状に突出するもので、魚々子文を沈線で表すM318刀や伝昌寧出土刀とは異なる。
- (5) ただし、半島系の工人が日本列島に渡来して、そこで製作したものであった場合、材料を持ち込んでいる可能性まで考慮すると、考古学的には半島製品との峻別は究極的には不可能である。
- (6) これらを同系統の文様と捉え、その差異を階層差や時期差とみる見解もある(李漢祥2012)。

謝辞

筆者が木村定三コレクション所収の環頭大刀および耳環を調査・検討することができたのは、愛知県美術館の長屋葉津子氏、黒田和士氏に全面的なご協力をいただいたおかげである。耳環の調査の際には、愛知県教育委員会の松本彩氏にもサポートいただいた。また、編集の労を取っていただいた由良渥氏には、様々な無理を聞いていただいた。末筆ながら、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 穴沢味光・馬目順一1976「龍鳳文環頭大刀試論—韓国出土例を中心として—」『百済研究』第7輯 忠南大学校百済研究所 pp.1-35
- 穴沢味光・馬目順一1986「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列—福島県伊達郡保原町愛宕山古墳出土の単龍環頭大刀に寄せて—」『福島考古』第27号 福島県考古学会 pp.1-22
- 李南夷2000「龍院里古墳群」公州大学校博物館学術叢書00-03 公州大学校博物館・天安温泉開発・高麗開発(韓国語)
- 李漢祥2006「武寧王の環頭大刀」『武寧王陵出土遺物分析報告書(Ⅱ)』国立公州博物館 pp.10-49(韓国語)
- 李漢祥2012「百済大刀の環頭走龍紋の検討」『考古学探究』第12号 考古学探究会 pp.21-39(韓国語)
- 李勲ほか2007「公州水村里遺蹟」遺蹟調査報告 第40冊 忠清南道歴史文化研究院・公州市(韓国語)
- 大谷見二2006「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004年度共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター pp.145-164
- 金宇大2017「金工品から読む古代朝鮮と倭—新しい地域関係史へ」プリミエ・コレクション79 京都大学学術出版会
- 金宇大2019「旋回式単龍環頭大刀の新例とその評価」『文化財と技術』第9号 工芸文化研究所 pp.13-29
- 金吉植2006「武寧王陵の環頭大刀」に対する討論『武寧王陵発掘35周年記念新報告書発刊のための武寧王陵学術大会』国立公州博物館 pp.127-130(韓国語)
- 金跳味(小谷地肇・鈴木勉・金宇大 訳)2013「大加耶龍鳳文環頭大刀の外環製作方法と復元実験」『文化財と技術』第5号 工芸文化研究所 pp.43-53
- 崔基殷2014「製作技術を通してみた武寧王陵出土装飾刀の製作地検討」『百済学報』第12号 百済学会 pp.35-68(韓国語)
- 新納泉1982「単龍・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号 史学研究会 pp.110-141
- 朴仲換・鄭相基(編)2006「武寧王陵出土遺物分析報告書(Ⅱ)』国立公州博物館研究叢書 第18冊 国立公州博物館(韓国語)
- 町田章1976「環刀の系譜」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報 第28冊 奈良国立文化財研究所 pp.77-110

挿図出典

- 図1: 朴仲換・鄭相基(編)2006より引用・再トレースのうえ作成
- 図2: 新納1982より引用・改変
- 図3: 筆者実測
- 図4: 1は朴仲換・鄭相基(編)2006を改変再トレース 2は筆者実測(滋賀県立安土城考古博物館蔵) 3は新納1982を改変再トレース 4は筆者実測(大阪府立近つ飛鳥博物館蔵)
- 図5: 1は筆者実測(国立歴史民俗博物館蔵) 2は筆者実測(東京国立博物館蔵)
- 図6: 1は李勲ほか2007を改変再トレース 2は筆者実測(国立公州博物館蔵) 3は李南夷2000を改変再トレース
- 図7: 李漢祥2012より引用

単龍環頭大刀柄頭【木村定三コレクション M318】



貴金具の双連珠魚々子文



表裏で独立して伸びる耳